

一光



教祖 140 年祭おぢばがえり

去る 1 月 26 日、教祖 140 年祭は厳かに、そして賑やかに執行されました。厳寒にもかかわらず教祖を慕い、その思召しに報いようと参集した道の子は実に 12 万余にのぼり、神苑周辺は冷気をも凌ぐ温かな真心と熱気に包まれました。アメリカ伝道庁管内からも教会長をはじめ多くの方々が帰参されました。

天 理 教 ア メ リ カ 伝 道 庁

No.939

FEBRUARY

2026



TenrikyoAmericaCanada.org



つらつらせんがく 熟々浅学



— 祭儀について (1) —

先月 26 日、教祖 140 年祭が無事に、滞りなく執り行われました。

教祖が現身をお隠しになられた明治 20 年陰暦正月 26 日に改めて思いを馳せて、心新たにこれからの道を歩むことを力強くお誓いして、日々御教えを実践していただければと思う次第です。

来月の 3 月 21 日と 22 日の両日に、以前は「スリーデーコース」として開講していましたコースを「ツーデーコース」と短縮して開講しますので、一人でも多くの人に参加していただけるよう、お声掛けをお願い致します。

さて、これから書くことは、自分の理解を深めることを主目的にしていることもあり、纏まった文章にならない可能性があります。また、認(したた)めている内容に納得できない方も出てこられるかもしれませんが、その場合はご容赦ください。先ずはお断りしておきます。

天理教の信仰者にとって、大祭と月次祭(以下、これらを総称して祭典と呼びます)は、信仰生活の中核をなす大切な信仰実践です。神殿に集い、祭主や祭員による厳粛な祭儀が執り行われる時、私たちは心身を引き締め、親神様の御守護と教祖の親心に思いを馳せ、感謝の意を表します。

しかし、立ち止まって「なぜ私たちは、このような形式に則って儀式を勤めるのだろうか?」と考えてみることは、信仰をより深く理解する鍵となるように思います。単に「昔からの慣習だから」という答えでは、この儀式が持つ深い意味を捉えきれないと思うのです。

この問いへの答えは、祭儀が持つ「形式(歴史)」と「本質(信仰)」という二つの側面から考察することで明確になると思えます。

現在の天理教の祭儀の作法が、日本の伝統的な神道の形式を強く帯びているのは、教祖ご在世当時の厳しい時代背景と深く関わっています。つまりこれは、教えを途絶えさせることなく、多くの人々に伝えるために、やむなく受け入れた歴史的な経緯の影響があるように思います。

教祖が教えを説き始めた幕末から明治にかけて、特に明治 7 年以降、天理教は官憲から厳しい弾圧を受けました。教えを守り、布教を続けるためには、当時の国の宗教制度の中に位置づけられる必要がありました。

天理教は、慶応 3 年(1867 年)に京都の吉田神祇管領に出願したのを皮切りに、明治時代に入ると神道本局の直轄教会となりました。明治 41 年(1908 年)に一派独立を果たすまでの間、天理教は公認の神道系教団として活動することを余儀なくされました。

この公認を受けるために、儀式を神道の定めにもって行う必要から、神道の要素を取り入れた祭儀式が整備されました。一派独立を請願した際の添付書類の一つである「天理教礼典」や、その後の「祭式作法」といった規定がこれにあたります。これらは、親神様の教えの核心を損なわない範囲で、当時の社会通念や法律に沿うよう形を整えたものだと思うのです。

今日の祭儀の作法は、こうした歴史の変遷を経て、現在の「おつとめ及び祭儀式」として結実しています。これは、先人たちが教え

を護るために払った苦勞と知恵の結晶であり、祭儀の形式的な理由を示していると思います。

しかし、形式はあくまで器であり、その器に注がれている「本質」こそが、私たちが祭儀を大切にすする最大の理由だと思っております。その本質とは、親神様と教祖に対する最高の敬意と感謝の心、すなわち「崇敬（すうけい）」の念を具現化することにあるのではないのでしょうか。

祭儀の作法は、人に見せるためでも、単なる慣習を守るためでもありません。それは、私たちが親神様と教祖の御前に居ると意識を深め、真心を込めて感謝を捧げるための心の表現だと思っております。

神殿の上段などでの作法に見られる「上（かみ）」と「下（しも）」を意識した動きは、この世のすべてを創造し、見守ってくださる親神様と、ひながたを歩まれた教祖への礼儀と敬意を表していると思っております。この敬意の姿勢は、私たちの心を整え、傲慢な気持ちを戒める役割を果たすのではないのでしょうか。作法を軽んじることは、親神様と教祖の存在を軽んじることに繋がりがかねない、という自覚を持つことが大切だと思っております。

祭儀式の中心で奏上される祭文には、「これから世の中が一日でも早く陽気ぐらし世界となるように心を込めておつとめを勤めさせていただきます」というような、世界たすけへ向かう私たちの決意と誓いが込められています。このお誓いを申し上げる儀式こそ、親神様への「崇敬」の心から自発的に生まれる、最も大切な行為なのかもしれません。

祭儀式は、祭主や祭員といった一部の人が行う儀式に留まりません。それは、その場に居るすべての人々、つまり参拝者が心を一手一つにする大切な実践の場だと思っております。

また、祭儀は、祭主の三殿礼拝から退場までの儀式作法だけでなく、開扉から献饌、そしておつとめ奉仕者の昇降の動作に至るまで、祭典全体を包み込むものとして捉えられるのではないのでしょうか。祭典の場におけるすべての行動は、「崇敬」の心に基づいた作法に則って行われるべきだと思っておりますが、皆さんはどのように思われるのでしょうか。

祭典（大祭や月次祭）が親神様と教祖への

御礼と願いを込めて勤められる以上、祭儀の作法に則って、全員が一糸乱れぬ態度で動き、真摯におつとめを勤めることが求められるのではないのでしょうか。この「一手一つ」の姿こそが、信仰者全体の「崇敬」の心を態度として示し、親神様の御心に届ける最大の力となるのではないのでしょうか。

おつとめを真摯に勤めることは、私たちの信仰を深めるだけでなく、「心の成人」を促し、人類救済という使命の自覚をもたらします。

日々の生活の中で、私たちはつい親神様の御守護を忘れがちになり、心が曇ってしまうことがあります。祭典という定期的な節目は、私たちに立ち止まり、信仰の原点を見つめ直す機会を与えてくれます。

祭儀（祭典）を通して、改めて私たちは日々の生活がすべて親神様の御守護の中にあることを再認識し、感謝の念を新たにすることができます。

教祖は私たちに「心の成人」を強く望まれました。祭典の場に臨み、厳粛な作法を実践することは、私たち自身の心を律し、成長させるための大切なお仕込みの機会なのかもしれません。

祭儀の中心である「おつとめ」は、この世を親神様がお望みくださる「陽気ぐらし」へと建て替えるための、最も大切な手立てです。私たちが心を込めておつとめを勤めることは、人類すべてが仲良く楽しく暮らせる世界を、自らの手で実現するという使命を、親神様にお誓いする行為に他なりません。

このように、天理教の祭儀は、単なる歴史的な形式の継承ではなく、親神様への「崇敬」を土台とし、信仰者が心を一つにして、「陽気ぐらし」という壮大な人類救済の使命を果たすための、誓いと決意を新たにすする場なのではないのでしょうか。私たちは、この祭儀を大切に守り、その本質を理解することで、より深い信仰へと進むことができることもあるのではないのでしょうか。（続く）

深谷 洋

立教 189 年春季大祭祭文

これの神床にお鎮まりくださいます親神天理王命の御前に天理教アメリカ伝道庁長深谷洋慎んで申し上げます。

親神様には、人間が陽気ぐらしをするのを共に楽しみたいと、紋型ないところから、この世人間をお造りくださり、旬刻限の到来と共に、母親の魂のいんねんある教祖をやしろに貰い受けられて、たすけ一条の道をお付けくださいました。爾来、御教えは世界に伸び広がり、このアメリカ、カナダの地にも、教祖のひながたを頼りに、世界たすけの御用に励む者をお与えただいておりますことは、誠に勿体なく有難い限りでございます。私共は、日々道の伸展に努めておりますが、その中にもこの月は、教祖が子供可愛い故に、二十五年先の命をお縮めになり、「今からたすけするのやで」と世界ろくちに踏み均しに出られた尊い縁の月であり、また、教祖百四十年祭を執り行う月ですので、只今から、ぢばの理を頂戴して、おつとめ奉仕者一同心を一つに合わせて、たすけ心と共に、陽気に座りづとめ、てをどりをつとめて、当伝道庁の春季大祭を執り行わせていただきます。

御前には、今日の日を待ちわびたよふぼく、信者一同が参集し、日頃賜る御高恩に御礼申し上げ、声高らかにお歌を唱和する状をも御照覧くださいまして、親神様にもお勇みくださいますようお願い申し上げます。

今月は、当伝道庁管内より、教会長を始め、大勢のよふぼく、信者が、教祖にお喜びいただきたいと、教祖百四十年祭に参拝いたします。道中無事にお連れ通りいただき、それぞれがぢばの理を頂戴し、土地所に戻りましてからは、尚一層、にをいがけ、おたすけに勇んでつとめられますようお導きの程をお願い申し上げます。

また、来月十四日には、教会長・布教所長・出張所長夫妻研修会を開催予定ですが、この地の龍頭となる人々の更なる心の成人の糧となる実り多き研修会になりますようお願い申し上げます。

私共は、教祖百四十年祭後も、更なる心の成人に努め、この道の伸展を願って邁進させていただく所存でございますので、何卒、親神様には、私共の真実の心をお受け取りくださいまして、世界の人々が手を取り合って勇み立つ陽気ぐらしの世の状に一日でも早く立て替わりますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

春季大祭神殿講話

アメリカ伝道庁長
深谷 洋

只今は結構に、立教 189 年アメリカ伝道庁春季大祭を、皆様と陽気に勇んでつとめ終えることができました、心より嬉しく、有難く思っております。

日頃はアメリカ伝道庁の上に、そして何より陽気ぐらし実現のためにお勤めくださり、心から御礼申し上げます。誠にご苦勞様でございます。

顧みますれば、去年は教祖 140 年祭年祭活動の 3 年目の年祭活動を進めておりました。そして、その 3 年目も終わり、先ほど教祖の御前にて祭文を奏上させていただきましたように、本年は教祖 140 年祭を執り行う年であります。

本日、伝道庁春季大祭を終えるに当たり、思いますところを述べ、また、皆様に年祭活動の上での最後の踏ん張りをお願いし、本日の祭典講話にいたしたいと存じます。暫くの間、お付き合いますようお願い申し上げます。

教祖 140 年祭は本年 1 月 26 日、おぢばにて執り行われます。教祖の年祭を勤める意義は、単に明治 20 年陰暦正月 26 日に教祖が 25 年先の定命をお縮めになり、現身をお隠しになられたことを偲ぶだけではありません。

立教 188 年の秋季大祭で真柱様は、「教祖の年祭は、子供可愛いゆえにお見せいただいた仕切りの節であります。これを勤めさせていただく私たちは、これまでの人々もそ



うであったように、子供可愛いゆえに、この節をもってお仕込みくださった親心にお応えさせていただくのが、年祭を勤める意義であります。」

（「みちのとも」立教 188 年 12 月号、8 頁）と仰せられました。

教祖が明治 20 年陰暦正月 26 日、私たち人間の心の成人を促すために定命を 25 年お縮めになられて現身をお隠しになられ、世界たすけの先頭に立って今も存命同様にお働きくださる親心に対して、教祖年祭時には、以前よりも増した私たちの成人した姿をお見せして、その親心にお応えさせていただくのが肝心であります。教祖年祭の真の意義は、その節目に携わる一人ひとりが、以前よりも心の成人が進んでいるところにあると言えるでしょう。私たちは、この年祭を機に、今後の信仰生活に確固たる指針を立て、実践していくことが求められています。

また、教祖が現身をお隠しになれた直後の

「今からたすけするのやで」と仰せられたお言葉に思いを致し、教祖のお心に沿って御教えを実践することを、改めてお誓いする時でもあると思うのです。

明治20年1月に、教祖と初代真柱様との間で交わされた問答は、「稿本天理教教祖伝」第10章に詳しく記されていますが、この問答は、私たちの信仰における最も大切な心構えを学ぶべき、教祖の最後のお仕込みであったと言えると思うのです。

明治20年1月1日の夕方、教祖は風呂場からお出ましの際によろめかれ、「これは、世界の動くしるしや。」

(稿本天理教教祖伝、303頁)と仰せになられました。その翌日はご気分が宜しからず、周囲の人々は心配しましたが、その時は程なく持ち直されました。

しかし、1月4日、教祖のお身上が急に差し迫った時、のちに本席となられた飯降伊蔵様を通して思召を伺われたところ、

「…さあ神が言う事嘘なら、四十九年前より今までこの道続きはせまい。今までに言うた事見えてある。これで思やんせよ。さあ、もうこのまゝ退いて了うか、納まってすうか。」

(前掲、304頁)とのお言葉がありました。これは、単なる問いかけではなく、教祖の教えが真実であることを実証し、私たちの信仰を根本から問い直す、厳しくも深い親心のお言葉でした。教えが真実であるならば、いかなる困難があっても道は必ず開ける。しかし、もし教えを実践する覚悟がないのならば、教祖は現身を隠すことも辞さない、との仰せでした。そして、そのお言葉の直後、教祖の息が止まり、お身体が急に冷たくなったのであります。

これに驚き、「大変だ」となった先人の方々は、翌5日から鳴物は不揃いのまま、連日、

教祖がお急き込みになられていたおつとめを勤めてお詫びをなされたのです。しかしながら、そのおつとめは官憲の目を恐れて、夜中にひそかに、門戸を閉ざして行われたのです。現代を生きる私たちから見れば、その行為はもどかしく、なぜ堂々と勤められなかったのかと感じてしまうかもしれません。しかし、当時の厳しい弾圧の状況を考えれば、先人の方々にとっては、それが精一杯の心定めであり、命がけの信仰的行為であったと拝察するのであります。

1月9日、教祖は、「さあ／＼年取って弱ったか、病で難しいと思うか。病でもない、弱ったでもないで。だん／＼説き尽してあるで。よう思やんせよ。」

(前掲、306頁)と仰せになられました。これは、教祖のお身体に現れた異状が、単なる病や衰えではなく、おつとめを急き込み、ひいては人間の成人を促すための、親神様からのお急き込みであることを仰せられています。しかし、教祖の仰せにもかかわらず、人々はなお法律の壁に阻まれ、おつとめの実践を躊躇(ためら)っておられたのです。

1月13日午前3時頃、初代真柱様は教祖に直接伺いを立てられました。さまざまな問答がありましたが、その中で初代真柱様は、おつとめが法律に抵触しないよう、猶予を願うというものがありました。これに対し、教祖は、「さあ／＼月日がありてこの世界あり、世界ありてそれ／＼あり、それ／＼ありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。」(前掲、320-321頁)と、何よりも人間の「心定め」が大切であることを丁寧にお諭しくされました。

私たちは日々の生活で、親神様の教えと世間の常識や法律との狭間で悩むことが多くあ

ります。しかし、この「おさしづ」で、信仰の基準をどこに置くべきかという問いに対する確かな指針をお示しく下さいました。信仰とは、世間の常識に頼るのではなく、自らの心を定めて親神様にお任せすることであると教えてくださっておられると思うのです。

その後、初代真柱様が「親神様は踏ん張ってくださるのか」と伺われると、教祖は、「さあ／＼実を買うのやで。価を以て実を買うのやで。」（前掲、322頁）

とお答えになりました。御守護をいただくには、先ず人間が真心の限りを尽くす、つまり心を定めることが先決であるとお諭しになられたのです。親神様の御守護は、単なる祈りや願いによって無償で与えられるものではなく、それを頂戴するに相応しい「価」、すなわち、確固たる「心定め」があって初めて現れるものなのです。

明治20年陰暦正月26日、教祖は、官憲の干渉を恐れずおつとめを勤修した先人たちの「心定め」をお受け取りくださいされ、満足気に鳴物の調べを聞かれました。そして、十二下りの最後のお歌の了った後、現身をお隠しになられました。教祖のお身体の平癒を願っての先人たちの決死のおつとめでしたが、その思いとは裏腹に、教祖は身を隠されたのです。先人たちのお心は如何ばかりであったのかと慮るばかりであります。

何故教祖は現身を隠されたのか。

それは、「今からたすけするのやで。」（前掲、333頁）というお言葉に集約されていると思うのです。教祖は「中山みき」という人間の身体を失くすことで、当時、教祖の御身に行われていた官憲の拘引という憂いを根本から取り除き、私たち人間が世界たすけのおつとめを心置きなく勤められる環境を整えられたのです。そ



して、教祖は人間の姿を現さずとも、今もご存命のまま、私たちをお見守りくださり、世界たすけの先頭に立ってお働きくださっているのです。

この親心は、天理教教典第3章にある「元の理」のお話と重なります。いざなみのみことの胎内から生まれた人間が「五分ずつ」成人しながら、三度生まれ出るお話の中で、三度目に生まれた人間が四寸まで成人した時、いざなみのみことは、『これまでに成人すれば、いずれ五尺の人間になるであろう』と仰せられ、につこり笑うて身を隠された。』（天理教教典、28頁）とあります。

教祖が私たちに遣されたお仕込みは、この「元の理」に通じます。教祖が「陽気な鳴物の音を満足気に聞いておられた」（前掲330頁）のは、官憲からの憂いを乗り越えて、先人の方々が自らの心を定めておつとめを勤められた真実を受け取られたからだと思のです。たとえ教祖が現身を隠しても、自立して陽気ぐ

らし実現への道を歩み続けられるとご判断なさったからではないでしょうか。

私たちは、教祖年祭を迎えるたびに、この「元の理」に示された「五分ずつ」の成人、つまり、以前の年祭の時よりも心の成人が進んでいることを、教祖にご覧いただくことが肝心だと思うのです。そして、その私たちの心の成人こそが、教祖の親心にお応えし、ご安心いただき、お喜びいただく何よりの証となるのではないのでしょうか。

教祖のご苦勞に報いるために、また、教祖にご安心、お喜びいただくために、私たちは心をつにして年祭を迎えなければならないと思うのです。

真柱様が論達第4号を、「世界たすけの歩みを一手一つに力強く推し進め、御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい。」（論達第四号、7頁）と締め括っておられるように、「世界たすけの歩み」を推し進めることによって培われる心の成人こそが、教祖にお喜びいただくための最高の贈り物なのではないのでしょうか。

立教188年秋季大祭で真柱様は、「三年千日の目標達成へ向けて、いまは一生懸命つとめておれることと思います。つとめたらつとめただけのご守護は現れてくるのであります。また、いましっかり動いたことは、これから先の歩みのための種蒔きであります。無駄になることはないのであります。」

（「みちのとも」立教188年12月号、8頁）と仰せられました。このお言葉を胸に刻み、教祖140年祭年祭活動の集大成として、残りの数日間を全力で邁進していただきたいと存じます。

人の親が子供の帰りを待ち望むように、私たち人類の「をや」である教祖も、ちばで私たちの帰りを心待ちにしておられます。アメ

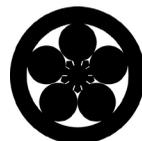
リカ伝道庁管内より、一人でも多くの方が、過去の教祖年祭よりも成人した姿を教祖にご覧いただけるように、教祖140年祭におちばがえりしていただきたいと思います。

しかしながら、何らかの理由で年祭に参拝できない方は、真柱様が昨年の秋季大祭で仰せられた、「力いっぱいつとめたという充実感と喜びをもって年祭を迎えることができるように、最後まで勇んでおつとめくださいますようお願いいたします。」

（「みちのとも」立教188年12月号、8頁）とのお言葉を胸に、年祭活動を「力いっぱいつとめたという充実感と喜びをもって」年祭の日を迎えていただきたいと思います。そして、できれば、今年中に、よふぼくとして成長した姿を、本部教祖殿にて、直接教祖にご覧いただけるように、おちばがえりしていただきたいと願います。

最後に、真柱様が新年のご挨拶の中で、「三年千日を勤め切り、一人ひとりが年祭当日を喜び心で迎えさせていただきたいと思えます。」（立教189年天理時報元旦号、1頁）と仰せられたお言葉も胸に治め、教祖140年祭を迎えていただきたいとお願いしまして、本日の話を終えたいと存じます。

ご清聴いただき、誠に有難うございました。





伝道庁連絡



春季大祭

祭主 庁長
 扈者 川上 和海 林 孝彦
 賛者 武本エディ 野町ジョナサン
 指図方 中富淳次郎
 神殿講話 庁長（英）

おはこび

サンフランシスコ教会
 神床及上段模様替・神殿増築並屋根葺替願
 遷座祭日願、臨時祭典願
 おはこび予定：2026年1月26日
 遷座祭：2026年3月7日
 鎮座祭：2027年8月28日
 奉告祭：2027年8月29日

布教所事情

ジョイアス布教所
 布教所ふしんの為、一時的な住所変更（～夏頃まで）

春季霊祭

3月14日（土）午後7時より、春季霊祭を執り行います。
 今回は、大西わきえ・カリフォルニア教会四代会長夫人の霊様を合祀致します。

Two Day Course

2026年3月21～22日の期間で、アメリカ伝道庁とニューヨークセンターにて開催致します。開催には最低4名の参加が必要となります。申込み締め切りは、2026年3月1日です。

修養科スペイン語クラスについて

9月1日から11月27日まで、修養科スペイン語クラスがおぢばにて開講されることになりましたので、お知らせします。日本国査証の必要な志願者は、お早めに伝道庁にお知らせください。

教会長資格検定講習会について

例年9月27日から、5名以上の受講者がいる場合に開講している教会長資格検定講習会英語クラスの日程が変更され、本年より10月27日から開講することになりました。

第86回アメリカ修養会

第86回アメリカ修養会が、2026年6月21日（日）から7月18日（土）まで開講予定です。開講約1ヶ月前（5月17日）までに、英語・日本語クラスは2名以上、スペイン語クラスは5名以上の申し込みがある場合に限り開催予定です。

立教189年4月の別席に関して

御誕生祭前後の4月は、別席者の増加が予想されることから、事前にライブの日時を決めています。天理教ホームページの「別席外国語スケジュール」、または海外部のホームページの「別席外国語スケジュール」から、予定をご確認ください。



天理教ホームページ



海外部ホームページ

各会連絡

布教委員会

- ・教会長・布教所長・出張所長による伝道庁月次祭当番をおつとめ頂き、有難うございます。以下に4月までの当番をお知らせ致します。
 2月：福井陽一、武本エディ
 3月：浜田准一、小島ブライアン、高垣弘明
 4月：雪本善、伊藤光春
- ・4月17日（金）に回廊ひのきしんを行います。帰参の方々は、朝づとめ45分前（午前5時）に、南礼拝場後方東側にご集合ください。

広報委員会

- ・各地で活動されている方々の情報を「一れつ・ニュースレター」に掲載し、管内の皆様と共有させていただきます。つきましては、各教会・布教所・地区、また身の周りの方々の活動情報・写真等の提供をお願い致します。情報提供先：川上 kamishuyo@hotmail.com
 林 takhayashi@gmail.com
- ・伝道庁ホームページは、管内の皆様にご活用頂けるように作成し、また常にアップデートを努めております。是非、伝道庁ホームページをご覧頂き、また周りの方々に紹介頂きますようお願い致します。
<http://TenrikyoAmericaCanada.org>

婦人会

- ・天理教婦人会第108回総会
総ての会員がおぢばへ 人を誘っておぢばへ
一別席者とともにー
2026年4月19日(日)
式典：午前9時30分 於：本部中庭
記念行事：・講演会 4月18日(土)午後5時
会場：第二食堂、東講堂、
東右第一棟4階講堂、
東左第五棟4階講堂
・支部の集い 式典終了後
- ・アメリカ婦人会総会
2026年5月16日(土)午前10時
記念行事：Family BBQ
- ・地区責任者の集い
2026年1月17日(土) Zoom

少年会

- ・今年の少年会おつとめまなび総会は6月20日(土)に伝道庁にて開催し、前日の19日(金)には少年会練成会を開催します。おつとめの役割は今月発表しますので、ご確認の上、各教会、各家庭でおつとめの練習をしてください。まだお申し込みいただいてない方は、次のGoogleフォームから参加者の情報を早急にご提出ください。
<https://forms.gle/dQDgYAm1tjRC2Krh8>

また、総会に向けて、各教会、布教所、出張所、及び各家庭にて、おつとめの練習をしてください。
・こどもおぢばがえりのテーマソングが新しくなりました。タイトルは「みちのこ キラリ」鼓笛隊の皆さんは練習を始めてください。音源、動画は以下からご視聴いただけます。

- <https://tenrikyo-shonenkai.org/kogsong/>
また、鼓笛隊では隊員を募集中です。
是非ご参加ください。
・少年会員に教祖のお話をしましょう。親子ぐるみで教会に参拝し、ひのきしんをさせていただきましょう。
・新生児や転入された少年会員がおられましたら、【moto1884@icloud.com】までお知らせ下さい。

青年会

- ・インターナショナルひのきしん隊が2026年7月18～24日の期間で開催されます。案内を今月配布させていただきます。是非お声がけをしていただき、興味のある方がおられましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。
seinenkainorthamerica@gmail.com

NYセンター

- ・3/21-22 ツーデーコース
- ・3/28-29 少年会おとまり会

TENRIKYO
MISSION HQ IN AMERICA & CANADA

WE'RE ONLINE!

www.TenrikyoAmericaCanada.org

Stay Updated! Scan the QR code with your camera phone.

携帯のカメラでQRコードをスキャンし、アメリカ伝道庁の最新情報をチェックしてください!

CALENDAR
tenrikyoamericacanada.org/events-calendar

BLOG
tenrikyoamericacanada.org/blog-timeline

NEWSLETTERS
tenrikyoamericacanada.org/publications

SERMONS
tenrikyoamericacanada.org/sermons

OYASAMA-INSPIRED STORIES
tenrikyoamericacanada.org/stories-inspired-by-oyasama

教祖 140 年祭おぢがえり
1/26



TENRIKYO MISSION HEADQUARTERS IN AMERICA
2727 EAST FIRST STREET
LOS ANGELES, CA 90033

NON-PROFIT ORG.

U.S.POSTAGE
PAID

LOS ANGELES, CA
PERMIT NO.30002

CHANGE SERVICE REQUESTED

THE JOYOUS LIFE



TENRIKYO came into existence on October 26, 1838, when God the Parent, Tenri-O-no-Mikoto, became revealed through Oyasama, Miki Nakayama, to save all humankind. God the Parent is the original and true Parent who not only created humankind but has nurtured and protected human beings ever since.

God the Parent created humankind so that by seeing us live the Joyous Life, God could share in our joy. The living of the Joyous Life is, therefore, the purpose of our existence. Since God the Parent is our Parent, we are all God's children, and thus we could realize that we are all brothers and sisters.

“With human beings:the body is a thing lent by God, a thing borrowed.
The mind alone is yours.”
Osashizu:June 1, 1889

We are taught that our bodies are borrowed from God the Parent and only our minds belong to us and, by the proper use of our minds, we will be able to live the Joyous Life.